

3) 胆嚢癌手術症例の検討

一切除例を中心に—

○吉岡 一典・阿部 僚一 (新潟県立吉田病院)
 榊原 清・小山 真 (外科)
 本間 慶一 (新潟大学第二病理)
 黒崎 功 (同 第一病理)

過去34年間の当科の胆嚢癌手術例は76例で切除は36例(治癒切除24例, 非治癒切除12例)になされた(47.4%)。男女比は1:2.3, 年令は35~87才で60才台に最も多かった, 切除例の術前診断は, 確診12例, 胆嚢結石症13例等々であった。術式は単純胆摘17例, 拡大胆摘+R2 9例, Gnにかかるため胆管切除を付加したものの4例等であった。胆石合併率は22/35(62.8%), 組織型は大多数がtub 1~tub 2であった。リンパ節転移は検索し得た範囲ではm, pm 癌に見られず, 全体で8/22(36.3%)の転移率であった。予後はm癌の12年を最長とし, pm癌11年10カ月など他のm, pm 癌5例も再発なく全例生存中。深達度 ss 以上の進行癌の治癒切除例の予後は, H, Nの再発死3例, 他病死が5例あるが生存9例中4例はすでに3年を経過している。予後から見る限り, ss以上の進行癌の治癒切除の方法, 更には再発防止の手段が当面の課題と思われる。

4) 当院における膵嚢胞症例の検討

○川野 賢一・谷口棟一郎 (小千谷総合病院)
 家里 裕・竹吉 泉 (外科)
 富沢 直樹・横森 忠紘

1982年1月から1989年7月までの8年間に小千谷総合病院外科で手術を行った10例の膵嚢胞症例について, 手術方法を中心に検討し, 最近経験した興味ある2症例を供覧した。10例の膵嚢胞の内訳は嚢胞腺腫2例, 嚢胞腺癌1例, 非腫瘍性嚢胞4例, polycystic disease 1例, 原因不明2例であった。男女比は1:1平均年令48.6才であった。主訴は腹痛及び腹部腫瘤が多く, 発生部位は大部分が膵体部であった。嚢胞内容液は腫瘍性は粘液性, 非腫瘍性は漿液性のものが多かった。腫瘍性嚢胞には摘出術又は膵切除術を行い, 非腫瘍性嚢胞には内瘻術を行って良好な成績を得ている。症例1は, 非腫瘍性嚢胞で, 嚢胞が上腹部から骨盤腔まで浸潤性に広がる巨大嚢胞であったが嚢胞胃吻合にて症状の寛解を得た。症例2は, 膵体部と尾部に発生した巨大仮性嚢胞であったが, 経胃的嚢胞胃吻合により嚢胞の急速な消失を得, 本術式が極めて効果的であった症例であった。

5) 早期胃癌を合併した高令者の無症候性 primary biliary cirrhosis の1例

○本山 展隆・小黒 仁 (南部郷総合病院)
 渋谷 隆・前田 裕伸 (内科)
 市田 文弘
 梨本 篤・加藤 清 (県立がんセンター)
 (新潟病院 内科)

症例77才, 女性。昭和54年より高血圧症にて経過観察中, 軽度の肝機能検査の変動があったが, 自覚症状を欠き放置されていた。昭和63年8月 GOT 52 IU/L, ALP 275 IU/L と上昇がみられた。精査にて, 血沈 39/66, T. Bil 0.6 mg/dl, GOT 54, GPT 45, ALP 205, γ -GTP 107 IU/L, IgM 820 mg/dl, HBsAg(-), 抗核抗体×2560, 抗糸粒体抗体×80, LE cell(-), ICG R₁₅ 8%, 肝シンチで血流指数の低下を認めた。胃内視鏡検査にて胃前庭部小弯後壁寄りにⅡc型早期胃癌を認め, 胃亜全摘術が施行された。試験切除肝標本では, 肝実質内に変性・壊死所見はなく, 中等大胆管を中心とした CN-SDC の所見を認め, Scheuer の stage I の PBC と診断された。

6) 消化管出血と黄疸を初発症状とした胃悪性リンパ腫の1例

○横田 剛・八木 一芳
 齊藤 敦・柳沢 善計 (新潟大学)
 佐々木 亮・成沢林太郎 (第三内科)
 上村 朝輝・朝倉 均
 小池 正・永井 孝一 (同第一内科)

症例は19才男性, 1988年12月により黒色便と心窩部痛が出現し1989年1月に入ってから高度の貧血を指摘され4月8日入院。入院時, 表在リンパ節腫脹や肝脾腫はない。内視鏡検査にて胃悪性リンパ腫と診断。経過中, リンパ節腫脹による閉塞性黄疸を認め, PTCD ならびに CHOP 療法を開始。経過は良好で, 3月11日退院。外来にて維持療法を行っていたが4月2日に左大腿部にとり痛を伴う腫瘤が出現。Ga シンチにて左大腿以外に両上腕, 腹腔内リンパ節, および脊椎に集積を認めた。胃原発の悪性リンパ腫の軟部組織への転移は稀とされている。本症例は短期間に再燃し, 軟部組織への転移を認めた稀な症例と考え報告した。